

2000年1月号

<主な内容>

主の年2000年のヴィジョン(1-4頁)

ブラジル教会訪問記(5-7頁)

北米ホーリネス教団の歴史(8-9頁)

OMS Holiness Church of North America

<http://www.omsholiness.org>

霊 聲

Web Version

特集・主の年二〇〇〇年のヴィジョン

牧師のヴィジョン



以下の記事は、提出者のお名前のアルファベット順になっています。敬称は略させていただきます。教会名も略称です。

吹上信一(引退牧師)

主の年二千年をお祝い申し上げます。新しい世紀のスタートと共に、教団、教会のめざましい発展を期待します。主から与えられたヴィジョンを実現されますよう祈らせて頂きます。

私個人としては、伝道の第一線

から身を引いたものですが、主に喜ばれる奉仕があるとすれば、それは祈りであると思っています。

牧会から離れ、時間が与えられているのに、今なお祈ることの少ないことを反省しております。祈りよりも読書や自分の楽しみに心がひかれます。祈りの祭壇を築き直して、祈りに心を注ぎだす二千年をと願っています。私のためにお祈り下さい。皆様の祈りの課題がありましたらお知らせ下さい。足りない者ですが、お祈りさせていただきます。

「主よ、…わたしたちにも祈ることを教えてください。」(ルカ十 一・一一)

「時間を掛けて祈る事、時間を掛けて人を愛する事、施す事は、神が人間に与えて下さった特権であり、天国への鍵である。」(不明)

細見剛正(サンロレンソ)

「気をつけて、目を覚ましていなさい」。これが主の紀元二〇〇〇

年を迎えるに当たって与えられた

お言葉である。物事を見極めるためには、目を覚ましていることが大事である。主の弟子たちが「先生、ごらん下さい。なんといい見事な石、何という立派な建物でしょう。」と言った時、主イエスは、あなた、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう。」と答えられた。(マルコ十三・一、二)

ヴィジョンという言葉が流行し、リニユーアルの必要が強調されて日久しい。しかし、実の伴わない屋気楼を追うようなことでなく、教団の、そして教会の、さらにめいめいの差し迫った霊的必要性目を覚ました。今はどういう時であるかを認識するために(ローマ十三・十一)、伝道の収穫のために(コロサイ四・一二、三)、それぞれの使命を果たすために(マルコ十三・三四)、再臨の主を迎えるために(ルカ二一・三六)。

鍵和田哲男（サファナンド）

牧師を始め、すべてのクリスチヤンにとって主の体である教会を建て上げることは、最大の使命であるといえるのではないでしょう。特に、牧師は「聖徒たちを整え、奉仕の働きをさせ、クリストの体を建て上げる」（エペソ四・十二）ために立てられているのですから、そのために働くことは、当然であると思います。

その意味において、私個人の二〇〇〇年のビジョンは、「委ねられた人々を、キリストにある成人として建て上げる」ことです。とは言っても、赴任してまだ二年半、ほとんど暗中模索の状態であることは否定できません。さらに、その働きには終わりがありませんから、主の年二〇〇〇年といっても、あくまでも通過点に過ぎません。そのようなわけで、私の場合は来年に何を達成するかというビジョンがあるというより、ただ主の導きを求めながら、前進するという以外に、心にあるものはありません。

溝口俊治（ロスアンゼルス）

新しい年、特に新しい世紀を迎えるこの時、「私」が神様に求める

より、「神様」が私たち人間に求められることを知らせていただきたいと思います。エゼキエル書四七・九に「その川の流れるところ、全てのものが生きていく」と記されています。拙くても私の存在が、また教会の存在が、まことに神に生かされているものである故に、他の人が活かされるため用いられたら幸いです。神様が望む、神のヴィジョンに生きた預言者の生き様を自らのものにしたと祈ります。

そうするとき、歴史ある教会に礼拝にも、伝道にも、弟子訓練にも、愛の交わりにも神様の臨在を深く覚えて、神様と共に生きる体験が再発見されていくことでしょう。二十一世紀にもその計画を持ち夢とヴィジョンを遂行される神様に、心いっばいお従いして行きます。

中村裕二（ホノルル）

いつもと変わらぬ日常とともに、二〇〇〇年を迎えて「Y2K」などの言い知れぬ不安と新しい世紀への期待とが入り混じった今である。高度情報社会の波はキリスト教界にも多大な影響と可能性をもたらしているが、最近のインター

ネットを軸にしたネット社会を言う時、「開放系」と「閉鎖系」という用語がさかんにつかわれている。

「開放系」とは種々雑多、玉石混濁な状態のインターネットであり、「閉鎖系」とは限定された範囲を深く掘り下げて精密化してきたパソコン通信である。私は二〇〇〇年を迎えて、この「開放系」と「閉鎖系」という概念を意識したい。

教会が宣教と伝道を考えたとき、それは多くの情報を社会に発信し、多くの人たちに教会に来ていただくという意味において「開放系」であるが、人が救われ、神を礼拝する教会の質が問われたときに教会は「閉鎖系」である。この「閉鎖と開放」のバランスが強いベクトルとなつて教会を前進させるのではないだろうか。信仰を深化させ、礼拝を礼拝としてささげる教会は健全に宣教と伝道が可能となるのではないだろうか。

中野雄一郎（巡回伝道）

一、ホノルルに Mt. Olive Ministries の事務所（土地と建物）が与えられる。
二、世界の日本人の霊的必要性に少しでも答える。
三、「JT」を通し弟子訓練と伝道

者養成に努力し世界に遣わす。

四、主にある友人をもっと大切にする。
五、夫婦、家族との時間をもっと多くする。

「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもつて、みことばを確かなものとされた。」（マルコ十六・二十一）

中尾邦三（サンディエゴ）

「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」（ヨハネ六・二十七）

新しい年の奉仕を思う時、上記の主のみことばを思い起こす。牧師は、教会のその時、その時の必要に応えなければならぬが、それと共に、もっと長い目を見た、真に教会に必要な霊的なもののために働かなければならないと思う。今の時代に持てはやされることすべてが、主の教会の健全な成長のために役立つわけではない。そうしたものに、うつつを抜かし、次の世代に堅固な主の群れを残すことができなければ、時代の

寵児になったからといって何の誉がある。主の来臨の時にも、残りうる教会を築き上げていくため働くことができるよう、祈っている。



大倉 信(ランチョ・ラコスタ)
主なる神は言われる、「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもない、主の言葉を聞くことのききんである」
(アモス八・十一)

私たちは二〇〇〇年という大きな時代の節目に立たされている。正直言うと、何か壮大なビジョンというようなものも、今は思い浮かばない。しかし、ただ一つ確信していることがある。それは、冒頭のみ言葉においてアモスが言ったように主の言葉を聞くききんが、

もう既に到来していることであり、これから、ますますこのききんは増大するだろうという確信である。今や、二〇〇〇年来変わらぬに神に立ちかえることを主張してきたバイブルに、立ちかえらざるうえない時ではないかと思う。そして、これが強いていえば私のビジョンである。単純にみ言葉の力と約束に自分をかけていく。あせらず、流されず、たゆみなく…。

大谷文三(サンタクララ)
ヴィジョンということには広い意味がありますが、ここで取り上げるのは、「主からの重荷」という角度からとらえてみたいと思います。すなわち、今主が私たちの教会にやらせたいと考えそのように教会の人々(牧師も含めて)に認識を起こして下さっていることです。牧師はそれを認知し霊的なリーダー達と確認します。教会はそれを主が下さった重荷として、実行に移します。

第一に、定例の祈禱会にもっと多くの皆さんが参加してくださるよう更に祈って行きたいと思っています。「以前は二十人以上の参加者がありました。」「若い子持ちの人には期待できません。」「生

活が忙しくて日曜礼拝だけで精一杯です。」等といる聞いていますが、なんだか半分諦めているような感じがします。それで、来る二千年には、まず問題提起、原因追究、意識調査等から手掛けてみて、このヴィジョンにふさわしい目標を定めたいと考えています。姉妹教会に於いても同じヴィジョンを追求しておられるならば、是非お聞かせください。

第二に、土地柄もあつて、日本からのビジネス・コミュニティーに福音の手を伸ばすというヴィジョンは現在も継続されています。「私たちの教会はシリコンバレーのオアシスです」と言つてテレビ番組などで日系コミュニティーに宣伝し始めて数年経っています。この重荷は主から出ていることであり、主は多くの日本人を今も教会に送り続けておられます。

第三に、建物の老朽化と施設不足のため日英両語部で新しい方向性を求めています。十何年前から祈り求めて来た隣接の土地が業者に買い取られたため、主は私たちの注意をひとまず現地所に限定しておられます。来る二千年には老朽した建物の美化と厳しい施設不足の緩和に、教会は向かっています。

す。

杉村 宰(オレンジ郡)
いよいよ紀元二千年が目前に控えているが、この時代は、共生の時代と言われる。それは私達の教会にも当てはまる言葉である。この記念すべき時代の節目に当たつて、オレンジ郡教会はここ数年間掲げられてきた教会育成二十項目を反省、吟味しつつ、新年は「祈りと収穫の年」と題して既に目標を設定してある。そして具体的には以下の三点を目指したいと願っている

第一に、祈ろう。

第二に、祈ろう。

第三に、祈ろう。

特に前回の牧師会で、私たちの教団の歴史と共に歩んで来られた、シカゴの葛原千秋先生は、「きよめの実践と共に、お互いに愛の交わりをすることが、わたしの信仰生活の結論です」と言われたが、その言葉がわたしの心に今も響いている。また千秋師を通して、しばしばご尊父の定市師が、百歳の時、父として十分に行き届かなかった事を子供たちに謝ったというお話を伺ったが、師の謙遜な生き方こそが、愛に根ざしたきよめの

模範であらう。

紀元二千年を迎える私たちに、私たちの信仰の土台に、神の愛をどのように活かしたらよいかを、第一コリント十三章を土台として、教会員共々に歩調を合わせ、共に励ましあい、共に祈りあいつつ、共に神の愛に生きるオレンジ郡教会である事を確認したいと願っている。

鈴木栄一（ホノルル）

わたしはこの国民と異邦人との中からあなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、それは彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によつて、聖別された人々に加わるためである。（使徒行伝二六・十七、十八）

これはいつの時代にも変わらぬ教会の使命ではあるが、二〇〇〇年というとりわけ大きな変化の年を迎え、今更のように新しく思い起こされる次第である。われわれの働きは常に日本語を話す人々への伝道であるが、それが何処でなされるにせよ、彼らの目を開かせ、一九〇〇年代の世界をその齒牙に

かけてきた悪魔の魔手から神のみもとに奪いかえす戦は、ますますその熾烈さをきわめるに違いない。さばきは神の家から始まるという足元をすくわれることのないように心し、全力投球で主の戦いに参加したいものである。われらの主の御名に、栄光あれ！

信徒のヴィジョン



池原 勲（ウエストLA）

二千年と言う世紀の節目の新しい年、WLAホーリネス教会は教会創立四十五周年、並びに会堂、教育館の献堂二十五周年の記念の年です。この記念の年を迎え、これまでの歩みを顧みる時、再度祈り求めて試みながら果たす事の出来なかつた日本語部の礼拝出席者一

〇〇名以上や、多目的ルーム、サundeースクール・ルームの増改築などの目標に達することが出来なかつた事などがあります。理由は書面では差し控えますが、目的に達せなかつと反省しても腰を下ろしては前進がありません。四十五周年の節目により大きなビジョンを掲げて立ち上がるべき二年を迎えました。

一、礼拝出席者一〇〇名の突破 家族伝道に重きを置いてきたのはチャーターメンバー達のスピリットであり煉教会の特色でした。今や、その精神の原点に立ち帰る時が来ています。

二、体育館が与えられること 二千年の教会は室内・体育館の設備の必要を痛感します。若い人々の夜間の交流や福音の場となると確信します。当教会はまず環境に恵まれています。近くにUCLA 大学、サンタモニカ カレッジ、私立英語学校、宝石学校などと日本人留学生も多く、また三世、四世の学生たちが北加やサンデーゴ地域から来ています。近くのソール日本街には青年たちが大勢たむろしています。設備さえ備えられれば大勢集まって来る人々のいる場所に教会があります。これ

は当教会に与えられた使命と信じます。

四十五周年の記念事業の一環として先ず隣接のアパートの購入のために祈りましょう。「祈ったことはすでに得たり」信じつつ、皆なで心を合わせ祈つて行くなら、必ず神様の創造の御業を見る事でしょう。ビジョンとして来るべき主の二千年に与えて下さった主の御名を賛えます。

霊聲ウェブ版 今年の出版計画

今年は、一月、三月、五月、七月、九月と十一月の六回、霊聲ウェブ版を発行の予定です。

ウェブページで見るHTML版と印刷可能なPDF版の両方で発行いたします。PDF版を各教会でプリントしてお配りいただけます。印刷室では、皆さんからの投稿をお待ちしております。Eメールでお寄せください。

jws@omsholiness.org

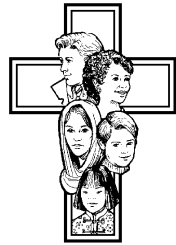
八月二十五日より九月一七日の間、ブラジル福音ホーリネス教団よりお招きを受け、第六八回ブラジル福音ホーリネス教団年会に出席、一三の諸教会を訪問させて頂きました。送り出して下さった常務委員会、招いて下さった湯浅敬師、迎えて下さった諸先生方に心から感謝します。

ブラジル福音ホーリネス教団の第六八回年度総会は九月四日、七日、パノラマ・キャンプ場（サンパウロ市より北西およそ三二〇マイル）にて開催されました。毎年、約一〇〇人のサンパウロ市地域の牧師、代議員、および関係者たちによって年度総会会議が持たれています。私たちはプレジデンテ教会牧師、田名網康三師夫妻の車で会場へ向いました。

一九九九年の年会聖句「涙を持つて種まく者は喜びの声を持って刈り取る」（詩篇一二六・五）のテーマにふさわしく賛美と祈りに満ちており、管理委員長・湯浅敬師のリーダーシップのもとに始終、霊的一致のうちに年会は進められました。朝は早天祈祷会で始まり、共に祈り、体操、朝食、午前、午後、後に続く年会、夜には聖会が持たれました。良く祈り、話し合い、

決議され新たな決断を神の導きとして信仰を持つて受けとめ、互いに献身の場として新たな奉仕の場へ派遣されて行く先生方、代議員の方々の姿に励まされ、主のくすしき導きを覚え主の御名を崇めました。

ブラジル教会訪問記



常務書記・古山 隆

J・田名網師夫妻はインドに宣教師として派遣された。田名網師は年会にて按主を受けられ祈りを持つて福音宣教のために送り出された。現在、日本にも二人の牧師が派遣されている。

現在、教団の神学生としてセミナーにて学びと訓練を受けている学生たちが紹介され、各自の召命の証しがなされ、彼等のため学びと将来に豊かな主の導きと祝福があるようにと祈られた。長年、信徒伝道者として伝道と牧会に励んで来られた牧師夫妻の退職に当たり、教団より感謝の辞、及び、ギフト贈呈、感謝の祈りが捧げられた。

湯浅敬委員長によるメッセージ（詩一二六・五による収穫の約束とチャレンジ）に続き任命を受けた全教職者夫妻と共に聖餐に預かり新任命の教会への出発の時として年会は終了した。

ブラジル福音ホーリネス教団は七〇年の歴史を持ち、サンパウロを始めとし、全州に教会をとの祈りを持つて日本語とポルトガル語に於ける伝道・牧会に励んでおられます。現在およそ三千名の活会員が与えられており、日系社会を中心に福音を全世界にと祈る、北

米ホーリネス教団との共通する歴史と目標を持っています。ブラジル福音ホーリネス教団年会でお会いした先生方、教会リーダーの方々と親しく交わりを頂きなら励まされること、学ぶこと、チャレンジされることの多い時であったこと感謝に絶えません。

諸教会訪問

ブラジル訪問中、私が訪ねた教会を報告させて頂きます。

カンポ・グランデ教会（八月二六～二九日） 湯浅敬師（教団委員長）、広瀬壮三師、夏目師によって牧会されている教会で現在二五〇人ほどの活会員があり、日曜日はポルタガル・日本語、両語における礼拝が持たれ賛美に溢れ活気に満ちた教会です。礼拝メッセージ、日語部の家庭集会にも参加させて頂き、主にある方々との交わりをもつことが出来ました。

ロンドリーナ教会（八月三〇～三一日） コーヒー栽培によって開拓されたロンドリーナ市は大変きれいな町であり、教会は湯浅ダビデ師、川島民江師（日語部宣

六八回年度総会のハイライト

始終、祈りと霊的な一致のもとに会議は進められた。（提案一 否決、提案二 改正後承認）
J・モレイラ師夫妻は中国に、

教師)が牧会されています。教会は両語による礼拝と共に毎週日語部による祈禱会がもたれており、ご用させて頂き共に祈ることができました。ホノルル教会から宣教師として派遣された中野まちこ師は英語を教えつつ、よき働きをしておられます。

マリंगा教会(九月一日) 両語を話される若い矢尋慎二師御夫妻によつて牧会されています。五年前に受洗されたという九二才の姉妹を先生と一緒に訪問しました。この姉妹は二才の時、家族と共に沖縄からブラジルに渡つた最初の移民の一人です。ブラジルでは日本語を話す人々の高齢化が進んでいます。教会では日本語を話す人々の救いが急がれ救霊のために励んでおられます。

プ・ブルデンテ教会(九月二〜三日) マリंगाから車で約二時間ほどの所にあり、教団ペテラン牧師、田名綱康三師(牧師二世)ご夫妻の牧会されるブルデンテ教会があります。先生ご夫妻は両語部の牧会に励み、各地に伝道所を持ち広い領域に及ぶ祝された伝道牧会をしておられます。定期祈禱

会にご用させていただき共に祈る時が与えられました。田名綱先生は日本、アルタデナ(加州)に在住しておられるお子様たちと毎日Eメールのやり取りをしておられる現代的な牧会者です。

教団年会(パノラマ・キャンプ場(九月四〜七日) パノラマ・キャンプ場にて六八回ブラジル福音ホーリネス教団年会が開かれ、客員として参加させて頂きました。教団の牧師、信徒伝道者、及び教会代議員およそ一五〇名が集まり、一年間の委員会の報告、提案の決議などが良く話し合われ主の御名が崇められました。湯浅敬委員長による任命発表で各牧師夫妻が前に進み出て、主からの任命として受けとめ伝道の地に遣わされる先生方の姿に感動を覚えました。

バストス教会(九月七日) ブラジル教団の創立者である物部起夫師によつて開拓された教会はフランシスコ・アッシシ・リポーカース師によつて日系人及びブラジル人を対象とする伝道がなされています。昨年四八名の受洗者が与えられ、急成長している教会の一つです。日曜日の夕拝にご用をさせ

て頂き、特に大勢の若者たちの出席があり賛美に溢れていました。

アダマンチーナ教会 アダマンチーナ教会は藤坂哲馬師ご夫妻が牧会されており日系人の救いの為に励んでおられます。現在ブラジルには日系人口一五〇万人ですが、経済的不況などの理由で約二三万人の日系人が「出稼ぎ」に日本に行つておられます。各教会にも家族の柱である兄弟が日本に行つておられ、教会の働きの一つとして残された家族への配慮と指導が求められています。

ポンペイア教会(九月八〜九日) 四五〇名の活会員があり、地域にインパクトを与える幅広い伝道と牧会に励む教会です。スモール・グループによる祈りと学びが成長の力となつています。結婚者の学びとサポートグループが注目されています。西村次郎師及び有能なフルタイム・スタッフたちによつて指導されており、賛美と活気ある教会です。

教団シャローム・キャンプ(九月九〜一〇日) 湯浅純師によつてサウパウ口市から車で二時間ほど

にあるシャローム・キャンプ場を見せて戴きました。海拔八〇メートルにある広大なキャンプ場には全教会の総収入の二%をキャンプ場、建築と管理のために捧げられており、すでに数百名を収容できる集会場、食堂、寮棟などが建っています。その夜、純先生がご自分で建てられた家の二階(屋根裏?)でゆっくり休ませて戴き、翌朝はキャンプで飼育している牛の新鮮なミルクを戴きました。純先生の祈りと願いは隣に高齢者用の修養会場を建てることです。

グルルリヨース教会(九月一日) 大前信夫、みどり宣教師夫妻らが両語で牧会されている教会です。高齢化する日系社会にあつて日本語を話す方々にも福音をと祈りを持って伝道、牧会に励んでおられます。ブラジルに於ける日本語による伝道の必要はこれからの一〇年にかかっていると言われます。日本語で証しされたり、信徒の霊的訓練などのセミナーなどを指導できる信徒、牧師の必要などを伺いました。

サントアンドレー教会(九月一日夜) 教会の増築の中にあ

り、日系三世、四世のクリスチャンたちの賛美に溢れ、愛の交わりの中で礼拝と伝道に励んでいます。バイリンガル牧師、森口イナシオ、としえ夫妻が牧会されています。主にある多くの方々との交わりが出来ました。引退後も尚、元気で励んでおられる南保義勝師夫妻ともお会いできました。

ポスケ教会(九月二日) ブラジル・ホーリネス教団の中心的な教会の一つであるポスケ教会には立派な礼拝堂、教育館があり、四〇〇名近いメンバーがあり、難波光男、静江師夫妻、首藤真、やすこ師夫妻らが牧会しておられます。日本語、ポルトガル両語で礼拝が持たれ「聖歌」も両語で賛美されています。聖日礼拝にて聖餐式に預かりました。

クリチーバ教会(九月二三日) 海拔八〇〇メートルの高原地であり、自然環境を重視したクリチーバ市にある教会は梶村均次、みさこ牧師夫妻、呉屋エドアルド師ご夫妻が牧会されています。聖日には合同礼拝、聖書の学び及び夕拝が持たれています。ペテラン牧師、梶村先生は盆栽、柔道などを通して

て日系社会への福音宣教に役立たせておられます。

リオデジャネイロ教会(九月一四〜一五日) 精神医学士としての資格を持ち、英語、日本語も堪能な二世牧師、鈴木牧、カチア師夫妻によって牧会されています。この日、買い物をしている時始めて出会った高齢の日本人の方を教会を紹介し集いに誘って来ましたと話しておられました。先生方の日系人への救霊心、情熱とたゆまない努力に心、燃やされました。

リベルダーデ教会(九月一日) サンパウロ市の日本人街に近くにある現在、新しい教会堂の建築の最中です。渡辺等師夫妻が牧会しておられます。サンパウロ州にはブラジル日系人口の五〇%が在住していると云われ、他の宗教も存在する中で福音的な教会としてキリスト・イエスを宣べ伝える生きた証し人として祈り、主に仕えている教会です。

教団事務所(九月一六日) 今年の三月に購入されたと言う二階建てのオフィス・ビルディングを訪問させていただきました。会議

室、事務室、ゲスト・ルーム、台所などを含むゆとりある新しい事務所にはフルタイムの秘書が働いておられます。ブ・ホーリネス教団では情報通信部が新たに設けられローカル教会との連絡を取っています。

ブラジル教会の力

ブラジル・ホーリネス教団の働きの実であり、大きな力となっていると思われることを、私の個人的な見解を含め、述べさせていただきます。

(一) 教団キャンプ場

二つのキャンプ場があり、教団の年会(総会)、牧師及び牧師家族の退修会、青年、学生の退修会、地域教会のリトリートや特別キャンプなどのために用いられており、新しい牧師の殆どはこのキャンプ場で持たれた退修会などにて献身されていると言われます。全教会の収入の二%はキャンプ場の建築、管理のために捧げられています。

(二) 信徒伝道師、婦人伝道師を含む任命

「全州にホーリネス教会」を目指

す教団は信徒伝道者を訓練要請し、諸教会に任命し、大きな働きがなされている。婦人伝道師が任命を受け、伝道、牧会に励んでいます。(聖礼典執行も認められている。)

(三) 信仰、献身の継承

ポルトガル語、及び日本語部の教会リーダー、及び牧師の子弟らが献身し、牧師、伝道者となって一世、二世リーダーの信仰と献身を継承して直接伝道活動に携わっています。

三週間のブラジル福音ホーリネス教団訪問ではありましたが、主が諸教会を通してなされている大きな業を見せて戴き御名を賛えています。お招き下さった教団委員長、湯浅敬師および諸先生方、交わりくださいました主にある兄弟に感謝に絶えません。主の御名を賛えつつ短い報告を終了させていただきます。

ウエストロサンゼルス教会の通信員報告より転載させていただきました

東洋宣教会・北米ホーリネス教団史(その十六)

戦中篇

オレンジ郡キリスト教会牧師・杉村 宰

さて、今回を最後にそろそろ戦時中のシリーズをしめくりたいと思う。

戦争勃発に伴い、ホーリネス教会も大きな混乱をきたした。幾つかの教会がしばらくの間、礼拝がもてなかつたり、帰還者がいなくなつたりで、教会としての機能を失い閉鎖された教会もある。ハワイ島のヒロ教会、オアフ島のワヒアワ教会(一九四〇年に既に閉鎖)、センタービル教会、そしてモデスト教会(一九四九年に閉鎖)が閉鎖されている。特にモデスト教会はロサンゼルス教会に次ぐ礼拝出席者を誇っていただけに、その将来が囑望されていた(ちなみにロサンゼルス教会の礼拝出席者が六三名で、モデスト教会は三八名であつたが、祈祷会の出席ではロサンゼルスを六名も凌いで二一名となつている)。モデスト教会は戦後もしばらくは礼拝が守られたが、

何せ帰還した家族が三家族しかなく、教会としての機能を最早ななくなつていた。

またサンフアナンド教会やポールドウインパーク教会(現在のサングェ プル教会)は戦後もしばらくは閉鎖されたままであつた。

西海岸に在住の日系人同胞は日米戦争による転住のために、全米に散らばつてしまひ。もう元のように西海岸に固まつて住むというよふな状況ではなくなつていた。また多くの場合、帰る家も財産も失つてしまつていたし、また西海岸に帰る場合にも、偏見のただ中に帰るのであるから、それは大変な勇気が必要とした事であらう。日本人と共に伝道してきたアメリカ人宣教師でさえも、同国民の面目をはばかつて、日系人を冷たくあしらうという悲しい事もあつた程であるから、それは決死の覚悟

と言えよう。

しかし勿論、フレンド派の人々のように、アメリカの世論はどうあれ、転住の当初から日系人に対して弁当等を用意して暖かい配慮をして下さつたグループもいた。その中でもニコルソン宣教師のように、転住所に閉じ込められている日系人のために、身を粉にして人道的な配慮をして下さつた方々のいたこともつけ加えておこつ。

さてここで戦時中の項を締め括るにあたり、どうしても記さなくてはならない事がある。それは私達の同胞が転住所(一般の日本人や日系人の収容されていた所)、あるいは収容所(特に日本と親しい関係にあつた人々が収容されていた所)に入れられている時に、海の彼方の日本でも信仰ゆえに同じく獄に入れられていた人々がいたという悲劇であり、何よりも私達

の北米ホーリネス教会の創立者の一人の岡本吾市師が獄にあつたという事実である。

それは一九四二年の六月二六日に始まるホーリネス系教会教職者達九七名の一斉検挙に始まる。さらに第二次検挙で二十名、海外の教師二十名、計百三十四名が検挙されたのである。その検挙の理由たるや治安維持法違反という名目であり、キリストの再臨の信仰を反天皇崇拜と結びつけて反国家守護であるとしたものである。この投獄によつて、横浜の菅野鋭牧師、大阪の小出朋治牧師、弘前の辻啓造牧師達は獄死している。またこの北米には一九三〇年に来られて各地で巡回伝道をして下さつた伊藤馨牧師(『靈聲』の四〇号に記されている)は終戦の十月十日までの四年間も札幌刑務所に入られている。

この刑務所生活は実に悲惨であつた。『嵐の中の牧師達』を記した辻宣道牧師(一九八七年にサンタバーバラ夏期修養会の主講師であり、昨年まで日本基督教団議長であつたが、一九九四年夏に召されている。辻師の祖父は日本ホーリ

ネス教団の初代監督の中田重治である。〕によって詳細に当時の教会の状況が如実に記されている。その内容は、「クリスチャンの母体であった日本基督教団からは、ホーリネス教会が正統派教会でない」と断じられ、見捨てられるという孤立無援の中で、辻啓造牧師は青森刑務所内で殉死していった」というものである。それは家族にとつては無念の一言では言い切れない、深く辛いものであったに違いない。

北米ホーリネス教会（戦前の呼称は「教団」ではなく、「教会」）もこの「四重の福音（新生、聖化、神癒、再臨）を強調していた。その信仰のゆえに、北米ホーリネス教会の創立者の一人であった岡本吾市師が一九二九年に日本に帰国してからは、日本ホーリネス教会の教職者の一員となり、広島で一年半にわたり獄につながれている。一世、二世がアメリカの転住所であえいでいる時に、日本でも獄にあつて呻吟していた私達の創立者の一人がいたというのは万感胸に迫るものがある。

第二次大戦終決以前に既に日系

人は転住所から解放されてはいたが、一世にとつての前途は実に多難であつた。しかしそれはまた二世台頭の時代でもあつた。日系人教会はいよいよ世代交替の時代を迎えようとしていた。（つづく）



歴史資料ライブラリー 建設資金贈呈式

一九九九年七月の教団総会で報告のあつた通り、シカゴ、レークサイド教会名誉牧師葛原千秋先生が、北米ホーリネス教団の歴史資料ライブラリー建設のために、多

額の献金をささげてくださいました。

十月十二日、ロスアンゼルス教会で持たれた南加牧師会に、葛原千秋先生がおいでくださり、その贈呈式が行われました。教団からは、先生に感謝のこたえを刻んだブラスを贈りました。写真は、南加の牧師たちと共に撮つたものです。

この基金の運用とライブラリー建設を具体化するため、杉村宰牧師を長とする小委員会が設けられました。以下は、その報告です。

「葛原基金委員会」（仮称） 報告

メンバーは、ロサンゼルス柴邦夫兄、メアリー田淵姉、サンフランシスコの米本ロブ師、そして私、杉村です。十一月三十日に話し合つたことですが、以下のように簡条書きにしてみます。

一、二十万ドルのインタレストはどのように使用されるのか、常務委員会の確認と葛原師からの確認をすること。これは後日、インタレストは葛原先生にお支払いす

ることもなく、委員会の方針に委ねられることを確認しました。勿論、その決定も最終的には、常務委員会の承認になります。

二、ライブラリー&ミュージアムを最も効果的に用いるのは、コンピュータ利用が最善と思われる。と言うのも、それだと、いつでも、どこでも、誰でも、その場においてアクセスできるからである。そのために、

ア、米本先生に専門のプログラマーに当たってもらうようにする。

イ、またそのために資料集めを田淵姉に続いてもらう。

ウ、資料集めの一環として葛原師の健在な間、先生のビデオ撮りとかをする。

もっとも、葛原先生はライブラリー&ミュージアムという場所を言われたのだが、いずれ教団本部とかの施設とかが設けられる時に併設してはどうだろうか。

（杉村 宰）



お祈りください

一月八日(土)はランチョロコスタ教会で南加新年聖会が行われます。講師は本多一米先生と中野雄一郎先生です。

一月十六日(日)はウォールナツツ・クリーク教会で北加新年聖会が行われます。講師は大谷文三先生です。
細見剛正先生は日本のお母様が危篤のため一月四日〜十七日、日本に行かれます。

一月二四〜二七日、マリブで牧師リトリートが行われます。二八日、二九日は常務委員会です。サウスベイ教会は現在教会堂として使用しているビルディングを一月末までに出なければなりません。サブリースしているビネヤード教会が家賃支払不能に陥り出る事になりま

した。サウスベイ教会にはすべての家賃を肩代わりするだけの能力はありませんので、必然的に出なければなりません。サウスベイ辺りで集会の出来るところを探しています。家賃七五〇ドル以下で総勢約二十二人(日本語、英語ユース)。もし何らかの情報があれば、安藤兄(hideyando@earthlink.net)までお知らせください。

教団委員の紹介(敬称略)

常務委員会議長 溝口俊治

世界宣教委員会

(長) 上村和男

伝道委員会

(長) 吉谷礼子

教会开拓委員会

(長) ロバーツ・ジョー

松田和彦

藤岡二郎

ラリー・米村

教理・調査委員会

(長) 米本ロブ

ヴィジョン・リソース委員会

(長) 伊達スタン

教職任命委員会

(長) 仲村ブライアン

中馬リック

中村モリス

小川カイト

戸田ジョージ

(職権) 溝口俊治(常務委員長)

古山隆(常務書記)

山下ゲリー(常務書記)

教育・出版委員会

(長) 辻村ルツ

福祉委員会

(長) 中辻ポール

富田セツ

年金委員会

(長) 満留アート

財務委員会

(長) カム・ヴァーノン

小田ジーン

斎藤ワルター

清井ガイ

スマート厚子

松田ジミー

奥井邦雄

常務書記 古山隆(南加担当)

常務書記 山下ゲリー

(北加、ハワイ担当)

会計 奥井邦雄

司法委員会

(長) 常石アーサー

大川道雄

小田ジーン

イーロッド

葛原基金小委員会

(長) 杉村 宰

柴 邦雄

米本ロブ

田淵メリー

夏期修養会準備委員会

(主事) 大川道雄

(書記) 中尾邦三

(会計) 馬場隆太郎

おことわり

このリストは完全なものではありません。印は、委員名を知らせていただいていないことを意味します。各委員長のご連絡をお待ちいたします。

名前の下のこの印は、日本語でのコンタクト・パーソンです。十名の常務委員のうち八名が英語部の方々ですので、各委員会に日本語でコンタクトできる方を立ててください。ご希望しています。お名前に間違いがありましたら訂正いたします。至急お知らせください。

第61回（二〇〇〇年度）北米ホーリネス教団夏期修養会

主題 二十一世紀への証人

神の幻に生きるきよめ（使徒二・17）

前OMSインターナショナル副総裁

講師 ヘルムート・シユルツツ 先生

日程 七月四日（火）午後～七月八日正午

会場 サンタバーバラ・ウエストモント大学

（参加申し込みは、各教会の登録係に

五月十四日までにお問い合わせします。）



メッセージの通訳、ユースのためのプログラムなどがあります。ご家族でご参加ください。

Holiness Web Ministry

ウェブミニストリー：四つの目標

アメリカは広い国です。カリフォルニアだけでも、日本と同じ面積があるのに、そのような州が 50 もあるのですから。そのようなアメリカに、北米ホーリネス教団の教会、伝道所、アウトリーチ、また、友好団体、教会、クリスチャンが、アリゾナからハワイにいたるまで、各地に点在しています。各地域ごとに集まるだけでも、何時間もかけてドライブし、全体が集まるとなると、飛行機で行き来しなければなりません。年に一度の教団総会の時さえ、教職者と代議員が集まるだけです。

そのような中で、お互いのコミュニケーションをより良くしていきたいと、1999 年 10 月より「北米ホーリネス教団ウェブページ」を始めました。第一の目標は、北米ホーリネス教団の諸教会がお互いに知り合い、祈り合うことです。そのために、各教会に「通信員」を置き、毎月レポートを出していただくようにしました。写真などもあって、お互いの教会の様子がよくわかるようになりました。毎月、すべての教会からのレポートが出るようになるのが当面のゴールです。「通信員」をお知らせいただけない教会は至急お知らせください。

第二の目標は、教団本部と諸教会とのコミュニケーションです。現在教団は、10 の委員会の委員長によって構成される常務委員会によって導かれていますが、各委員会は、それぞれの地域に分散しております。どの地域に教団本部を置いても、教団本部に遠い教会は、やはり教団本部との距離を感じてしまいます。しかし、教団本部をウェブ上に置いたら、すべての教会、個人と教団本部との距離は対等になります。いつでも、どこからでも、教団本部に問い合わせ、情報を得、連絡をすることができます。(しかも、このヴァチャル・ヘッドクォーターズのための経費は、月にたったの 30 ドル ウェブホスティング料+ドメインネーム使用料 なのです。どこかに事務所を借りれば、月に千ドルは必要になるでしょうに!) このために、常務委員会の議長、常務書記をはじめ、各委員から、すくなくとも年四回(常務委員会ごと)レポートをいただくようお願いしてあります。これが軌道に乗り、教団本部と諸教会の活発なやりとりがなされるようになれば、教団の運営に大きく寄与することと思われま。

第三の目標は、北米ホーリネス教団が培ってきた霊的な資産を多くの方々に紹介することです。そのために、北米ホーリネス教団が創設期から刊行し、戦中、戦後も止むことのなかった『靈聲』をウェブ上に復刊させたく思います。その中に、牧師たちのメッセージや聖書の学び、信徒のあかしを多く載せていきたいと願っています。皆さんの原稿をお待ちしています。また、21 世紀にむけて教団の 80 年史を残していきたいと思っています。日本語の文書を手に入れるのが困難な海外のクリスチャンのために、霊的な養いとなるものを、ウェブ上で出版できれば、幸いです。

第四に、このページを通して、北米の日系教会、日本語教会はもとより、南米や日本の諸教団、教会との交わりが深められるようにと、願っています。全世界の日本語を話すクリスチャンの文字どおりのワールド・ワイド・ウェブが拡大していきますよう願っています。北米ホーリネス教団へのリンクを、皆さんの教団、教会、グループのウェブページに載せてください。リンクの際は、ウェブページ管理人にご一報いただければ感謝です。

Email 宛先 jws.omsholiness.org